

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 金 光来

本論文は、朝鮮朝後期の碩学、星湖李瀼（1681-1763）の性理学思想を主に分析したものである。大きく序論と本論5章と結論より構成されている。

第1章では、星湖の家系と生涯と著述、家系と不可分の関係にある党色について分析し、それを通して星湖の学問的背景には小北系南人の「自得」を重視する学問傾向と朱子・退溪を継承する強烈な道統意識が併存したと、すなわち背景の二重性を明らかにする。

第2章では、星湖の経学観と学問方法について分析を行い、星湖は上記二重性に由来する方法上の「堅守」と「自得」の調和を図るために不苟新・不苟留・不苟棄の研究方針を採用したことを論証し、その目標を達成するための技法の一つとして「不恥下問」を実践し、ひいてはそれが異端の西学の受容を可能にする斬新な発想へと発展したと述べる。

第3章では、星湖の学問理念がもたらした結果としての西学研究に注目して思想分析を行う。星湖の西学受容はイエズス会の宣教方針である適応主義が功を奏した結果であり、とりわけ星湖は、彼自身が西欧伝来の心論として看做していた靈魂論に対して強い関心を持ち、その研究に取り組んでいたことを明らかにする。

第4章では、星湖の四端七情理気論の目的と特徴について分析を行い、星湖は退溪の「四端理発、七情気発」説を証明するため、感覚と理性を峻別する公・私の二情論を案出したことを論証した。その際、星湖は人間存在における大気（一身・感覚）と小気（心臓・精神）の区別を想定し、自らの「四端理直発・七情形気発」の説の根拠としたと述べる。

第5章では、星湖受容の靈魂論知識と星湖四端七情論の特徴を本体論と心性論の領域に分けて対照分析し、星湖四端七情論の独創性は、西欧の三魂説（生魂・覚魂・靈魂）を始めとして、天主から賦与されたアニマが一身から心臓へと分かれるアニマの存在方式や、感覚的認識と理性的認識の違いをもつ靈魂の理性能力に関する西欧起源の知識の強い影響のもとに形成されたと結論する。

本論文において第一に評価すべきは、星湖学を特徴づける、強烈な道統意識と致疑・自得の追求、すなわち伝統的な思考と斬新で自由な発想の併存について分析し、その相反する二つの原理の調和を図るために打ち出された学問理念と学問方法を明らかにしたところである。星湖学に即して、方法論上矛盾する二原理の止揚を解明した意義は大きい。第二に、星湖の独創性に富む新たな四端七情理気論の創出が、西欧靈魂論の強い影響のもとで形成されたことを論証したところである。とりわけ慎後聃の『遯窩西学辨』を根拠に『靈言蠡勺』の深甚な影響を解明したところは評価に値する。李瀼の西学研究の内実と西学と儒学の混淆をよく明らかにしているからである。

本論文には退溪以来の朝鮮朱子学とのより深い関係解明など、今後に残された課題もあるが、先行研究を批判的に継承しただけでなく、従来思想研究のレベルを大きく越え出たところも多い。

審査委員会は以上に基づいて、本論文が博士（文学）の学位に値すると判断する。